# フランスの司牧的な 旅。「希望において 喜びなさい |

8月1~5日、オプス・デイ属 人区長、フェルナンド・オカ リス師は、フランスを司は、 訪問しました。属人区の信 がその友人たちとの出会いが 機会に際して、 「希望に がある生活を過 よう勧めました。

2017/08/22

# フェルナンド・オカリス師のフランスの司牧的な旅の記録

#### 8月5日

パリに滞在した8月5日、属人区長はいくつかの家族に会いました。いつも家族的な雰囲気のうちに行われました。「とりわけ、私たちは私たちが住んでいるベトナムと、職場における使徒職について話しました」と、両親と兄弟と一緒に参加したクレールは述べました。

ポールは妻のベンディクテと3人の子供、ジョゼフィーヌ(16歳)、チャールズ(12歳)とフィリップ(10歳)と一緒にパドレに会いました。「私たちは9年前、良いキリスト教的形成を提供する学校に子供たちを入学させるためにフランスに戻ることを決めたと説明しました。パ

ドレは、親自身がそのような教育プロジェクトの中心にいるように聖ホセマリアが望んでいたことを教えてくれました。」

レティシアは、両親と兄弟たちを 伴って、オカリス師に会いました。 入学試験に合格して、看護師の勉強 を開始しようとしていると説明しま した。属人区長は看護師の仕事の大 切さを考えるように励ましました。 「看護師こそが、病院が良い雰囲気 を保つための基本的な役割を果た す」と。「パドレは娘がとても元気 づけられるような展望を開いてくだ さったので、彼女は天職に対する誇 りで胸を一ぱいにして、この団らん を終えました」とお母さんが述べて いました。

多くの人々は、フランス滞在の間に、いくつかの個人的な意向を打ち明けることができました。「私たちは、ある特定の意向についてお願い

することができました。パドレは、 次のミサの時に彼女のために祈ると 約束してくださいました」とポール 氏は述べています。

「属人区長と話すことによって、キリストへの忠実を保って生きようとする意欲が再燃されました」と、妻のヴィクトワールと子供たちと一緒にパドレに会ったアキッレさんは説明しました。「若くて今日的であるオプス・ディの精神の美しさを体験できました。」

「話している間に、特別なことは何も起こらなかったが、私たちはもっと希望をもつようになりました。 人区長が伝えるものは、平和と声がに話した。 だから彼に話した でと思います。 だから彼に話した。 パドレの近くでは、人が愛さっていると感じています。」とマリーさんは話しました。

#### 8月4日

8月4日の午後、オプス・デイ属人区 長は、リュー・デュ・バクにある不 思議のメダイの礼拝堂を訪問しまし た。そこでは、巡礼者たちを迎える 「愛徳姉妹会」のシスターたちに挨 拶し、二階の礼拝堂でロザリオを唱 えました。

#### 不思議のメダイの聖母の前に

前日、属人区長は後に聖母マリアに 委託しようと考えていたいくつかの 意向を知らせました。教会と教皇、 オプス・デイの信者と全世界に広が るその使徒職の取り組みについてで す。

「第1バチカン公会議は、教皇の使命は、カトリック教徒の一致を確保することであると定めました。だから、難しい使命を託された教皇は、

それを実現するために、私たちの助けと私たちの忠実を必要としています」と述べ、教皇様のために祈ることの重要性を強調しました。

礼拝堂を出ると、祈るために来ていたオプス・デイの信者や他の人に挨拶することができました。オカリス師は一人ひとりと言葉を交わしました。

# 洗礼を受けた小教区で

フェルナンド・オカリス師は、1944年11月18日に自身が洗礼を受けたパリのスペイン人教会にも行きました。主任司祭は暖かく彼を迎え、教会でしばらく一緒に祈った後、洗礼の記録が記された洗礼台帳を見ることができました。

去る前に、オカリス師はゲストブックに言葉をしたためました。「私が 聖なる洗礼を受けたこの教会を訪れる喜びのうちに、パリのスペイン人 の司牧を務める共同体のために祈り ます。|

# 8月3日

フェルナンド・オカリス師は昨日、 クヴレールの小さな町にパリから旅 をしました。正午ごろ、そこでキリ スト教の形成プログラムを行ってい たオプス・デイの信者たちの出迎え を受けました。フランス人以外に も、フィリピン、中東、イタリア、 スペインの学生たちがこのコースに 参加していました。何人かは、彼ら の国で行われている活動を紹介しま した。ラトビアでの社会支援、フラ ンスの大学の夏コース、ヨルダンで のボランティア活動、レユニオン島 の黙想会など。

本当の若者になるために、キリスト に倣う オプス・デイ属人区長は集まった若者たちに述べました。「年をとっても、キリストを人生のための模範にするなら、いつまでも若くなります。どうやって成功するかと尋ねられるなら、それは毎日の目標を始め、主にすべてを委ねるということです」

また、私たちが互いを助けることを 可能にする聖徒の交わりの重要性と 有効性を思い出した。「我々は一人 ぼっちの人間として住んでいませ ん。私たちのすべての行動や私たち のすべての祈りは、他の人の生活に 影響を与えます。」

# メッセージの中心、自由

オプス・デイの他のメンバーとの以前の集まりと同様、属人区長は、キリスト教的な喜びの重要性を強調しました。また、自由についても幅広く語り、そのような高い目標への鍵は、「愛するとき、自由な行為がそ

こにあります。そして自由に特有な 行為とは愛することです」と指摘し ました。「こうして、私たちは自分 の義務を果たすとき、自由に神を愛 することが可能となるのです。」

# いちょうの木、永続のシンボル

集会後、属人区長は、そこの庭にいちょうの木を植えました。前任者の福者アルバロ・デル・ポルティーリョ(1988年)とハビエル・エチバーリア司教(2011年)も、継続性の象徴であるこの同じ種類の木を植えました。

# 8月2日

「私はパドレがフランスに来ることを知ったとき、パリでパドレと会うために私の休暇の予定を変えました」と、31歳のソフィアは述べてい

ます。彼女のように、他の多くの人たちが、オプス・デイ属人区長のフランス滞在中の4日間に出会うことでしょう。オカリス師はフランスの首都で生まれました

オプス・デイのメンバーとの最初の 集いは**8**月1日に、到着の数時間後に 行われました。この旅行の主な理由 は、「キリストに忠実であるよう に、そして常に喜ぶように励ますこ とです」と属人区長は語りました。

# 苦しみは喜びと互換性があります

水曜日午前に、属人区長は、若い女性のための霊的・文化的活動を提供しているヌイリーにあるフォントネーヴというオプス・デイのセンターを訪れました。

初めに、フェルナンド・オカリス師は、この旅行中に伝えたいと思っている主なメッセージをこうまとめました。「キリスト者は、幸せになる

よう、陽気な性格をもつよう、そして平和を伝えるよう呼ばれています。なぜでしょうか。それは、私たちが神のお気に入りの子どもだからです。」

各自の人生の困難について、属人区 長は語りました。「時々、私たちは 苦しみ、泣くこともあります...しか し、悲しむことは?いいえ、それは ありません」聖ホセマリアの言葉を 引用しながら、祈りの助けを借り て、困難な時期にも喜ぶことができ ることを思い出しました。

# 神がすべてを知っているのに、なぜ 願わなければならない?

教師のマリーさんは、「私よりもはるかに私が望むことすべてを知っておられる神に何かを求めることに、どういう意味があるのですか」と尋ねました。「まず、イエスは私たちが尋ねなければならないことを、まず私たちに語ったから。そして、祈

りの中で私たちは神に心を開いて、神の意志を受け入れる心構えが出来上がるからです」と属人区長は答えました。団らんは**45**分間続いた後、お告げの祈りを皆で唱えて終わりました。

#### 友情の力

セーヌ川の傍にあるガルネール文化 センターの団らんでは、哲学を学ぶ 学生であるアグスティンが、信仰の ための余地がない閉鎖的な合理主義 の環境の中で、時々対話が困難だと 語った。属人区長は、すべての信念 を相対化しながら、すべてを理性の 判断にゆだねてしまうことはパラ ドックスであると答えました。この 矛盾そのものが、対話を始めるきっ かけとなり得るだろうと。それで も、「真実に誰かに同行するための 最良の方法は、友情です」と付け加 えました。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkucho-furansu-tabi-2017/(2025/12/16)